

## 日本文化における「見立て」

聖心女子大学 水島尚喜

### 見立てとは

日本語の「見立て」(MITATE; to see as) は、辞書的に「ある物から別の物の様子を読みとったり、なぞらえること」を意味する。日本画、和歌、歌舞伎、生花、茶の湯、造園などの日本文化の中で、「見立て」は創作の重要な要素となっている。例えば、室町時代の作と伝えられている京都竜安寺の枯山水の石庭では、白砂の中に大小十五の石が配されていて、虎が子どもを連れているように見えることから「虎の子渡しの庭」と呼ばれている。さらに、「深山幽谷」や「宇宙」の世界を表現しているとも言われている。枯山水様式の石と白砂による空間から、其々別の「意味」が生じているのである。江戸期に流行した「絵手本(グラフィック誌)」の中では、「見立て」の手法によって成立する「見立絵本」の刊行が顕著となる。中でも宝暦五年(1755年)に刊行された山本亀成作・漕川小舟画『絵本見立百化鳥』は、和綴1ページの縦半分に日用品を「木」と「鳥」に見立てた絵を掲載し、隣接するスペースにウイット(こじつけ)を効かせた文章が附され、絵と文の五十対が構成されている(図1)。

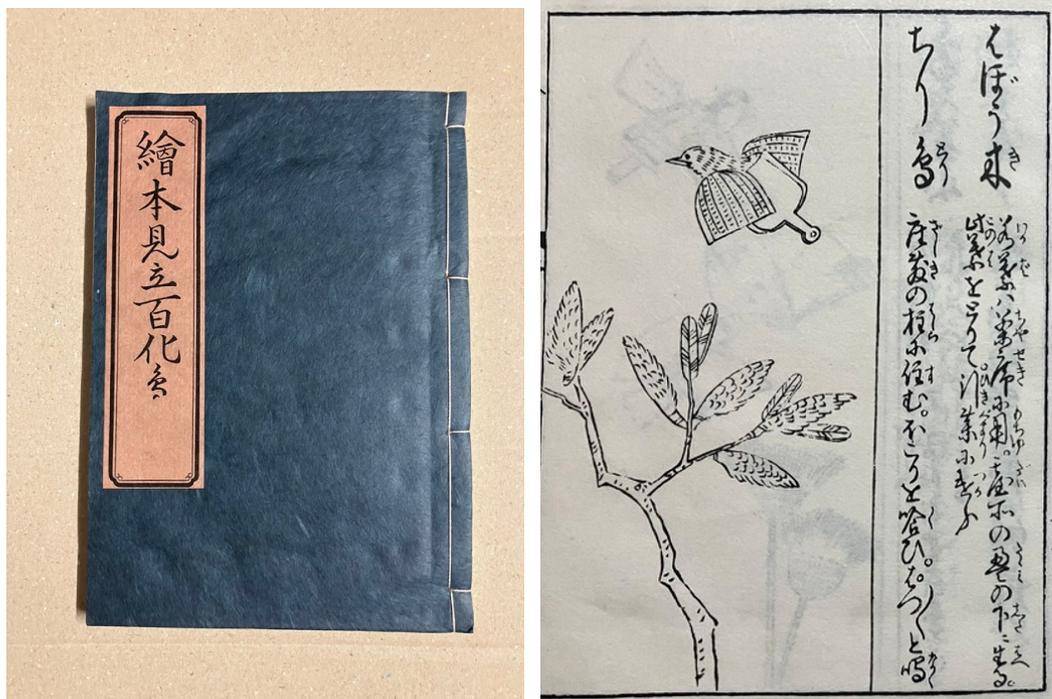


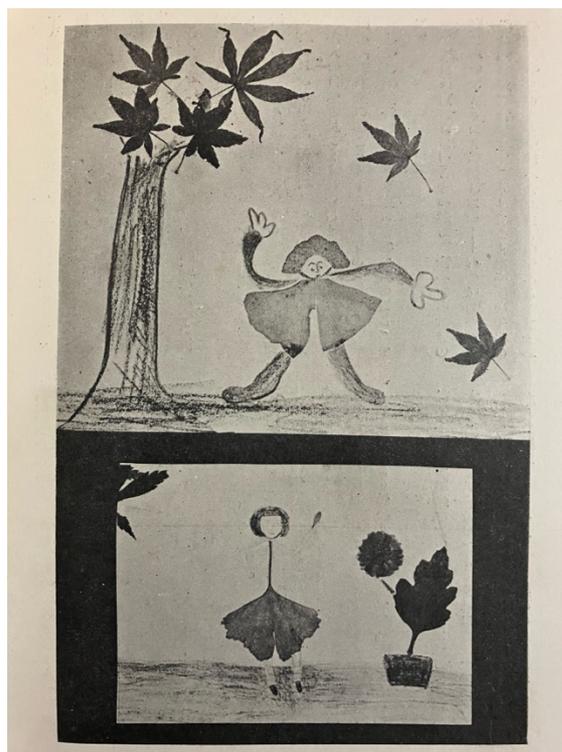
図1、左：和綴の表紙(尾崎久彌による複製本、1970) 右：冒頭の図版ページ(鳥の体部分が箒とちりとり、木の葉が鳥の羽になっている。)

図1は、掃除に使用する「えぼうき (箒)」と「ちりとり (塵取り)」を取り上げている。下線部「き；木」と「とり；鳥」には、漢字があてがわれており、言葉の見立て(駄洒落)が、絵としても描き出されている。見事な、そして他愛のないこの絵本が、その後の「見立絵本ブーム」の火付け役となる。意味を読み換える見立て(滑稽さ)が、作品成立の重要な要素となっている。このような江戸期における町人文化には、風刺の効いた日常感覚が溢れていたと推測できる。さらに、19世紀後半から20世紀初頭のヨーロッパでは、日本の「浮世絵」や「うちわ絵」等の日常品のブームが当時あった。それらの根底には、「生活とアートの一体化」を標榜するジャポニズムへの憧憬が存在していたように思われる。すなわち、「日常の中の美を愛でる」という構えである。

一方、当時の江戸の日常生活は、小氷河期と言われるほど寒かった。また飢饉も頻発していた。その中で、制度化されたアートには見出せない、日常とアートを架橋する有益なアプローチとして「見立て」が位置づいていた。例えば、台風や地震などの自然災害などの物理的現象も、「風神、鯨」へと起因を可視化(見立て)することによって、得心することができた。または、何らかの心の平静が得られることを江戸庶民は知っていたのかもしれない。

### 日本の美術教育における「見立て」

ここで、国内の美術教育へ目を転じてみよう。明治期以降、近代化の流れの中で、絵を描く行為そのものは、一義的な絵の有用性の文脈で語られてきた。すなわち明治5年の学制発布以来、「写画」や「臨画」といった事物の再現性を主眼とする絵画指導及び方法論が主となった。この内容は、直接的に生産性を上げるという富国政策につながり、江戸期における「見立て」の水脈が、明治期以降の教育の中で途絶えることを意味した。そのような経緯の中、「構成教育」の動向では、ドイツの芸術学校「バウハウス (Bauhaus:1919-1933)」の予備課程で行われてきた基礎造形をシステム化して移入し、戦前の国内で影響を与えた。その内容を体系化し、国内で刊行されたのが、川喜田煉七郎、武井勝雄による『構成教育体系』(学校美術協会出版部 1934)である(図2)。



(図2 左：表紙、右：1年生児童作品；楓、銀杏、菊などの葉っぱを用いたコラージュ作品 p.3 より)

冒頭の「構成教育とは」の中では、次のように構成教育の主旨が記されている。

構成教育とは丸や、四角や、三角をならべる事ではない。所謂構成派模様を描くことでもない。絵や彫刻や建築にめんどろな理屈をつけることでもない。我々の日常の生活の極ありふれた、極卑近な事を充分とり出して見て、それを新しい目で見なおして、それを鑑賞したり、作ったりする上のコツを掴みとるところの教育、それが構成教育である。(該当書 p.1 より)

日本における構成教育では、バウハウスのモダンの手法を採用しながらも、日常性を授業に取り入れ、そこからの発見や読み換えを行っていた。図2の右図のように、葉っぱを何かに見立ててコラージュする行為は、子どもが世界の多様な発信から受け止めた内容を表現することに他ならない。さらには、絵画空間における「間」の取り方など、日本人の感性とのつながりも指摘できるのではないだろうか。



(図3 題材名：光とかげから生まれる形」文部省検定教科書「図画工作4年」日本文教出版 令和3年版より)

現代の美術教科書においても、このような日常場面における創造的な空間の読み取りは、多く題材化されている。図3の教科書見開きページでは、左側黒地部分に人工光、右側黄色地部分に自然光、を用いた「造形遊び」の事例が掲載されている。このような題材では、光のみならず、実在と影の動的なメタモルフォーゼをテーマとしている。生み出された変幻自在のダイナミックな形は、北斎漫画にある「江戸百態」を彷彿とさせる内容となっている。子どもの中に本来的に存在する「動的な活力」は、世界から生きる形を見出す「見立て活動」に出自があると言えるだろう。

自然からの声を聴く

日本のみならず、「見立て」というメタファーの表現技法は、意味生成の原理が内包された、人間の根源的な認識方法でもある。太古の洞窟壁画を描いた人類も、暗闇の中で灯す松明で生じた壁面の凸凹に投影された形の中に、生命を見出した。さらに、自分の中の闇に潜む意識や欲望を、洞窟の暗闇の中に反映させていたのではないか。描く行為を通して、自分自身と出会っていたように感じる。

「見立て」は、人間の文化や価値観、感性の在り様と深く結びついた行いであり、現象である。実証的研究には、そぐわない側面もあるが、そこには人間存在の豊かさへと通底する確かな水脈がある。

CONNECTEDkind (Ck) は、コロナ期に誕生した。困難な時期を、自然からの声をメタファー表現として世界に送り返す意味はとても大きい。発案者のラウラ氏の母国はラトビアときく。自然豊かなラトビアの大自然からの形を受け止め、多面的視点から新しい意味（生命）を与えようとする行為は、世界の救済につながる行為のように見える。Ckの活動中は、実体から生じた影の部分を重視されていると伺っている。実体は一義的な意味を持つが、不定形の影は「Space for Imagination」として万人に開かれているのである（図4）。本来自然と共に生きてきた人間のヴァナキュラーな文化的アイデンティティが投影されている。人類のサステイナブルな方向性を考える上でも、Ckは、極めて重要な提言的行為であると言える。



図4 ラウラさんのドロップレット作品（ご本人からの提供）